

第8回 羽州街道交流会 上山大会 開催報告

上山城477周年・ブレかみのやま温泉開湯555周年記念
(開館30周年)

第8回 羽州街道交流会

山形県 上山大会

開催日 平成24年11月17日(土)～18日(日)
会場 かみのやま温泉 月岡ホテル(主会場)
基調講演 テーマ「沢庵禅師と上山」
講師:正木 晃氏
(宗教学者・慶応義塾大学文学部・立正大学仏教学部非常勤講師)

分科会

第1分科会「街道と上山温泉」
パネラー 藤原 光氏(山形市立図書館長)
廣瀬 隆吾氏(山形市文化財専門員)
富土 重人氏(かみのやま温泉旅館組合長)
村松 貞氏(山形大学准教授・羽州街道交流会幹事)
コーディネーター 村松 貞氏

第2分科会「沢庵禅師と上山藩」
パネラー 木村清三郎氏(山形市文化財保護審議会副会長)
三春 弘之氏(山形大学理事局長)
鈴木 信氏(上山城管理公社学芸員)
コメントーター 正木 晃氏(宗教学者・慶応義塾大学文学部・立正大学仏教学部非常勤講師)
コーディネーター 島津 憲一氏(羽州街道交流会代表幹事)

第3分科会「たくあん・漬と山形の食文化」
パネラー 庄司 隆氏(青岡庵 店主)
栗野 静枝氏(彩食料理 折鶴 店主・野菜ソムリエ・雑穀エキスパート)
鈴木うめ子氏(郷土料理研究家)
近 清輔氏(全日本漬物協同組合連合会副会長・山形県漬物協同組合理事)

主催 羽州街道交流会上山大会実行委員会
(山形市・朝・上山城管理公社・NPO法人上山まちづくり基・山形市観光ボランティアガイド協会・羽州街道交流会)

後援 山形市教育委員会・山形市観光物産協会・山形市商工会・かみのやま温泉旅館組合・山形農業協同組合
JRかみのやま温泉駅・上山市まちづくりセンター・上山郷土史研究会・上十日町商店会・中十日町商店会・下十日町商店会
十日町地区景観まちづくり協議会・朝町商店会・石崎商店会・地下地区会・地下町保存会・地下町研究会・平成上山藩
上山土協会・上山藩御心会・秋家屋敷保存会・地下町町生士会・水田町ふるさとづくり協議会・三島地域連携協議会
やまがた草木花のつくりワークショップNPO法人会館街道交流会・よほほ街道交流会・みやぎ街道交流会・おくし家街道交流会
全日本漬物協同組合連合会・山形県漬物協同組合・国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所

開催日:2012年11月17日(土)～18日(日)
会場:月岡ホテル

(主会場・第1分科会・街道談義)
上山城多目的ホール(第2分科会)
武家屋敷三輪家(第3分科会)

主催:羽州街道交流会上山大会実行委員会
(構成団体:羽州街道交流会、山形市、
上山城管理公社、NPO 法人まちづ
くり塾、山形市観光ボランティアガ
イド協会)



11月17日(土)

開会式 13:25～ 会場：月岡ホテル



オープニング	上山藩鼓笛楽（上山市指定無形文化財）
開会の挨拶	羽州街道交流会 島津 憲一 代表幹事
主催者挨拶	羽州街道交流会上山大会 鎌上 宏 実行委員長
歓迎の挨拶	上山市 横戸 長兵衛 市長
来賓祝辞	全国街道交流会 古賀 方子 専務理事
来 賓	全国街道交流会 古賀 方子 専務理事
	宮城県七ヶ宿町 梅津 輝雄 町長
	福島青桑折町 高橋 宣博 町長
	福島青桑折町 半澤 高 町議会議員
	青森県黒石市 黒石ナナ子 市議会議員
	上山市 横戸 長兵衛 市長
	上山市 木村 英雄 副市長
次回開催地挨拶	青森県黒石市 黒石ナナ子 市議会議員

基調講演 14:00～ 会場：月岡ホテル
テーマ「沢庵禅師と上山」



講師：正木 晃 氏
宗教学者、
慶応義塾大学文学部
立正大学仏教学部非常勤講師



◇禅とはなにか

禅の起源

- ① 仏教の基本は「戒・定・慧」→戒律+瞑想+智恵
- ② 定=瑜伽（ゆが・ヨーガ）→呼吸を中核とする身体技法
- ③ 二種類の瑜伽→寂静の道→古典的ヨーガ/禅定 →会陰部を刺激しない
→増進の道→ハタ・ヨーガ/密教ヨーガ→性的ヨーガ
- ④ 禅の悟り→「ブッダの悟り」の禅的解釈→「本来の自己」という自覚
- ⑤ ダラーナ（執持） ディヤーナ（禅） →サマーディ（三昧）

(意識集中) (集中徹底) (対象との一体化)

- ⑥「禅宗」は中国で成立→慧能(638~713):「禅戒一如・定慧一等」・南宗禅:
菩提達磨?・・・→五祖弘忍→六祖慧能(えのう) = 「頓悟」・・・日本禅・
北宗禅 →神秀(?~706) = 「漸修」
- ⑦中国禅の特徴→祖師禅 *インド禅→如来禅
- ⑧道教の影響→内観との類似性・「無」の哲学
儒教の影響→「礼」の思想+般若の哲学
- ⑨中国禅の思想的核→華嚴思想→「一即多」・「有無一如」
- ⑩五種類の禅→圭峰宗密(けいほうすみつ 780~841)による分類
- ・外道禅: 仏教以外の禅→ヒンドゥー教=大我禅(梵我一如) ←無我禅=仏教
 - ・凡夫禅: 利益追求の禅・自我中心の禅
 - ・小乗禅: おのれの救いを求める禅
 - ・大乘禅: 他者救済のための禅・菩薩の禅・自他不二(じたふに)の禅
 - ・如来清浄禅: 自然法爾(じぜんほうに)の禅→最上乘禅
(祖師禅): 生活禅=無作(むさ)の妙有・大機大用(だいきだいゆう)
- ⑪五家七宗(唐・五代・宋)
- 滄仰宗(いぎょうしゅう) →公卿の禅
 - 曹洞宗 →士民の禅
 - 雲門宗 →天子の禅
 - 法眼宗 →町人の禅
 - 臨済宗 →将軍の禅
- 黄竜派
 - 楊岐派
- ⑫看話禅(かんなぜん) →公案によって悟りを追求する禅 →公案禅
黙照禅(もくしょうぜん) →ひたすら座禅して悟りを追及する禅
- ⑬中国禅は明末に滅亡
- ⑭日本禅の興隆→栄西→臨済禅→公案禅
→道元→曹洞禅→只管打坐(しかんたざ)
→隠元→黄檗禅→念仏禅
- ⑮近代日本への影響→廃仏毀釈後の仏教復興に寄与
→日本思想の根源→西田幾太郎・西谷啓治
→文学への影響夏目漱石・岡本かの子

日本臨濟禅の実像

- ①臨濟禅の系統は二十一流→黄竜派→栄西
→楊岐派→蘭溪道隆・無学祖元・一山一寧など（中国人）
*現在の臨濟禅は大応・大燈・関山の一系のみ
- ②栄西の二重性→禅密兼修→臨濟禅の祖師（臨濟宗黄竜派）
→天台密教葉上派（ようじょう）の祖師
- ③禅を受容した中世日本の意識→密教僧⇄禅僧
- ④禅僧の呪術的能力に期待する人々→厳しい修行が靈力を育む可能性
- ⑤怨霊対策に期待→南北朝の争乱→後醍醐天皇・護良親王などの怨霊を鎮める
- ⑥傑僧・夢窓疎石（1275～1351）→「七朝の国師」→安国寺・利生塔を全国に建立
- ⑦禅精神→「平常心」を養う→武士の素養→緊急有時に的確に対処できる心身の育成
→想像を越える中世武士の実像→組織暴力団に近い暴力性
- ⑧もう一つの禅の実像→東班と西班→宗教集団「西班」+実務集団「東班」
- ⑨経済官僚としての東班
 - ・対明貿易を仕切る
 - ・室町幕府の徴税を請け負う→比叡山を凌ぐ実力→室町幕府を支える
- ⑩墜落する禅僧たち→五山の実態→贅沢三昧・美少年愛
- ⑪応燈関の三代→日本臨濟禅の頂点
 - 大応（南浦紹明 1235～1308）←南宋の虚道智愚（きどうちぐ）を師とする
 - 大燈（宗峰妙超 1282～1337）→大徳寺開山→坐亡
 - 関山（関山慧玄 1277～1360）→妙心寺開山→立亡
- ⑫聖胎長養（しょうたいちょうよう）→悟りの胎児を育む
- ⑬一休宗純（1394～1481）→後小松天皇の落胤→「風狂」
- ⑭白隠慧鶴（1685～1768）→近代禅の源流
- ⑮釈宗演（1859～1919）→円覚寺中興の祖→鈴木大拙・夏目漱石の師（『門』）

沢庵禅師の生涯と思想

- ①沢庵宗彭（そうほう 1573～1645）→但馬国の出石に生まれる
- ②20歳で、大徳寺の董甫宗仲（とうほそうちゅう）に師事→大燈国師の衣鉢を継ぐ→反骨・在野・只管弁道（ひたすら悟りを求める禅）
- ③堺・大安寺の文西に儒学や詩歌や書を学ぶ
- ④31歳の時、堺・陽春庵の一凍紹滴（いっとうしょうてき）の弟子となり修行
→1年後、印可を受けて、「沢庵」の道号を授かる→一凍の唯一の法嗣（はつす）
- ⑤36歳の時、勅招により大徳寺の住持となるが、三日後に去る
- ⑥以後の7年間、郷里の出石、宗鏡寺に隠棲し読書三昧

⑦紫衣事件により大徳寺・妙心寺が弾圧されたことに抗議して、出羽の上山に流罪

→従来の紫衣勅許の制度に対し、幕府が統制をつとめる目的で、弾圧した事件

→体制寄りの五山禅を保護する幕府に対し、沢庵は敢然と抗議

⑧3年後に赦免され、三代将軍家光の帰依を受ける

⑨柳生宗矩などと交友→『不動智神妙録』

⑩家光の外護により品川に東海寺を建立

⑪73歳で生涯を閉じる

→禅と権力のはざままで翻弄されつづけ、必ずしも幸福ではない生涯という自覚

⑫遺戒

全身を後の山にうずめて、ただ土を掩（おお）うて去れ。経を読むことなかれ。齋（とき）を設くることなかれ。道俗の弔腑（ちょうふ）を受くることなかれ。衆僧、衣を着、飯を喫し、平日のごとくせよ。塔を建て、像を安置することなかれ。諡号を求むことなかれ。木牌を本山祖堂に納むることなかれ。年譜行状を作ることなかれ。

我が知人は一人も世に無之候。

仏法を行い申すべし存ずる心は、毛頭胸より出で申さず候

出家のわざもいやになり申し候て、袈裟をぬがざるばかりの出家

俗人、衣、袈裟身にまといたる分にて、当年の中々と死期を待つばかりにて居り申し候

死後ノ事毛頭不思、末世之法三十年前ニ見限り候間、相續之事不思、寺之事、……其外一事望ム所無シ

沢庵禅師の思想

①『理気差別論』（1621）→儒学（朱子学）の「理気二元論」に対する禅の弁論

- ・理に名はなく、あえて理という。天については理といい、人については性という。その本質はなんら変わらない
- ・動静の気は、物によって動静して、生き生きとした気となる。不動静の理は、活気を生じることがない。ただ正直であることをもって、物事の規範となる
- ・人を生むのは気の変化である。山川の気は山川によって動静する。草木の気は草木によって動く。水土の気は水土によって動く。有情の気は有情によって動く
- ・人には氣質があるために曲がる。理は氣質を離れているために直である。人が理に従う時は、直である。この理にそむくから、曲がるのである
- ・曲直を離れるを直とする
- ・自己が一生不生の時、性は虚空のようだ。空ゆえに、どこにも行きわたる。かたよらぬゆえに、正という。不変不党のゆえに、直という。直に従うゆえに、道という

- ・混元の一気は、混沌のまだ分かれぬ時の元氣である。乾元の一気は、混沌がすでに分かれ、清んだものが昇る一つの元氣である
- ・氣に實體はない。物によって顕われる。氣が昇れば、水が昇る。…・春夏は氣が昇り浮く。花が開き緑が茂る。これが氣の顯れである。…・氣が静かな時は陰、氣が働けば陽である。氣は陰陽、陰陽は氣である

②『安心法門』→沢庵禪師の真理論

- ・迷う時は、人が向こうのもの（真理）を逐いまわしている
- ・解る時は、向こうのものがこちらに入ってくる
- ・解る時は、識が色をとりこんでしまう
- ・迷う時は、色が識をとりこんでいる
- ・自身ありと考へて、目の前の客觀を分別するのはすべて夢である
- ・有心とは心にものをとどめること。無心とは心にものをとどめぬこと
- ・もし識心が寂滅して、一つのゆらぐ念もないところを、正覺と名付ける→第三祖僧璨（そうさん？～606）の『信心銘』→「一心が生じなければ、万法に答はない。答がなければ、法はない、生じなければ心ではない」に対する沢庵の解答→一切法を見るのは、みな妄想である

◎若亦人造一切罪。自見己之法王。即得解説

*『玲瓏集』（晩年の述懐）

栗柿の実をもつてたとへ候。いたみ、かなしみなしとは、人から見申したる分別にて候。かれが上には、いたみかなしみも、自然とそなはり候とみえ候。草木のいたみたる風情、人のいたみうれふる気色にかはる事なし。或は水をそゝきなどするときいき出たる、よろこばしき風情あり。きりたれば、たほれころびて、葉しほしほと成てはて候。体、人の死にいたるにたかふ事なし。かれがいたみかなしびを、人しらず。

去程に中有に五根なくしても、五事をわきまふる事、今此現有とかはる事なし。わきから見えぬばかりなり。その身からは、現在のごとし。またかたちもなきにあらずといへども、幽微なれば、見かたし。鳥が虚空をとひゆくに、遠くへなる程、かすかにして、やれやれとおもふ中に、はやかたちを見うしなふものなれども、此鳥の形きえて、なくなるにはあらず。幽かなる故に、見えざるなり。

うすくして、さだかに見えざる形なれば、中有をば人は見ず。かれはいつもいきて居たる時のごとく、人を見れども、人は是を知らず。罪障ふかき中有は、形あらはるるなり。人自然にこれを見て、幽霊などろいふ。又なき事にあらず。

…

中有と執心ふかければ、形をあらはす。あさきものは、虚空とおなじければ、人は是を見ず。人はこれを見ざれども、かれは是を見る。我は形ある故に見らる。かれは形幽なる故

に、我から見る事あたはず。

* 『東海夜話』(晩年の述懐)

此宗に志深きは、我に財を呈せずとも、仏祖報恩を知る人也。これ我喜ふ所也。財は我益なし。又志誠ならば、一把の野菜なりとも、我為めに誠を呈すと思は、我金玉よりも重くせん。志不誠則雖金玉如一毛。金玉我無用。食朝一粥暮一粥。知足。衣紙被二棉衣。住処はその居一畳に過ぎず。衣食住の三つに煩無ければ、金銀更無用。金銀自然にあらは、堂塔可當貧窮可恵。強て求得て不足為之。

.....

◇ 沢庵禪師と上山

紫衣事件の概要

- ①慶長 18 年 (1613) 勅許紫衣竝に山城大徳寺妙心寺等諸寺入院の法度・勅許紫衣法度・大徳寺妙心寺等諸寺入院法度
- ②慶長 20 年 (1615) 禁中並公家諸法度→朝廷が妄りに紫衣や上人号を授けることを禁止
 - 一 紫衣の寺住持職、先規希有の事也。近年猥りに勅許の事、且つは臆次を乱し、且つは官寺を汚し、甚だ然るべからず。向後に於ては、其の器用を撰び、戒臆相積み智者の聞へ有らば、入院の儀申し沙汰有るべき事。(第十六条)
- ③後水尾天皇は慣例のとおり、幕府にはからず十数人の僧侶に紫衣着用の勅許を賜与
- ④寛永 4 年 (1627) 幕府 (徳川家光) →法度違反とみなす→勅許状の無効を宣言
 - 京都所司代の板倉重宗に法度違反の紫衣を取り上げるよう厳命
- ⑤朝廷は強く反対/大徳寺住職の沢庵宗彭・妙心寺の東源慧等らも朝廷に同調
 - 幕府に抗弁書を提出
- ⑥寛永 6 年 (1629) 幕府は、沢庵ら幕府に反抗した高僧を出羽国や陸奥国への流罪に処す
- ⑦幕府の法度は天皇の勅許にも優先→幕府>朝廷の関係を確立

沢庵と紫衣事件

- ①37 歳：後陽成天皇の詔を奉じて大徳寺に紫衣出世
 - 大徳寺に住することわずか三日、退山の渦を残して南宗寺に帰る

* 退出の偈。

由来我是れ水雲の身、回りに名藍に住す紫晒の春。

耐えず明朝南海の上、内鵬は終に紅塵に走らず

- * 天皇の綸旨により紫衣出世→朝廷とゆかり深い大徳寺と妙心寺→皇室の祈願所
→朝廷の官錢収入の財源

幕府の公帖により黄衣出世→ほかの五山はした。前者は皇室→公家武士の祈願所
→幕府の官錢収入の財源

②紫衣法度第二条→参禅修行は、善知識に就いて三十年綿密な工夫を続け、千七百則の公案を透過し了った上に、各地の老師を遍歴して普ねく教えを受け、真俗二諦を成就、出世の衆望が集まった時、諸知識の連署により申し出る場合、入院許可。

→元和法度以後に出世した者はすべて紫衣資格を剥奪→大徳寺・妙心寺のみに適用

③寛永5年→玉室宗珀・江月宗玩と三名連署して大徳寺を代表し抗議の書を提出

*「千七百則の公案透過」は虚説

→名匠は一句一偈を見て、縁に逢い事に触れて大悟、千門万戸一時に開く。大悟は必ずしも古則に依らず、修行年数にも依らぬ。

④天海・柳生但馬守→無罪主張

金地院崇伝・林羅山→権現様の法度を否定するふとどき者と断罪

⑤57歳：妙心寺硬派を流罪：沢庵→上山／玉室→陸奥棚倉／単伝→出羽由利
東源→陸奥津軽

*後水尾天皇は退位

⑥思ふことなきだにやすくそむく世に、あはれすててもをしからぬ身を

あし原やしげればしげれおのがまま、とても道ある世にあらばこそ

沢庵はもともと山林閑居を好み、政治にかかわることなど思いもよらなかった。

*江戸の落首

雨ふれば沢の庵も玉むろも、流れてあとににごり江の月

玉の室、沢の庵もながされて、むそかすばかり残る江の月

上山の日々

①7月27日 江戸を出立

沢庵の誌

天、南北に分かれ雨樋（二羽のかも）飛ぶ、何れの日にか旧棲（旧巢）翼を双べて帰らん。聚散、常無く只此の如し、世上の禽も枢機（向きを変える機）有り。

沢庵の歌と誌

白川 都へとむかしの人も今の身も、便りあらばの白河の関
金風吹き起こす白川の波、秋は胸襟に満ちて感慨深し。百歳人間元
旅寓（仮の宿）、東漂西泊是れ娑婆。

信夫にて 乱るなど人を諫むる折からに、わが心さへしのぶもぢずり
松島ちかければ ゆるされぬ身はいつゆきてみちのくの、ちかのしほかまちかきかひ
なし

②8月半ば 上ノ山の配所に着き、土岐山城守に預けられる

四日後の堀丹後守への手紙

誠此度宗門之事にまっすぐな事を申て、御意にちがい、出羽の国まで流されしと申事は、二代三代も人の口に残り可“申候。名聞と申ながら、末世にはせめてみようもんたりとも残り候らえば、満足に存候間、心さえちにけがれ候わず

③土岐山城守が沢庵のために庵を作ろうと申し出た時→なるべく小さくと申し入れ

→ささやかな萱葺きの庵→「春雨庵」→扁額をかかげる

思ひて昔わすれぬさよ枕、夢路露けきまどの春雨

はなにぬる胡蝶の夢をさまさじと、ふるもおとせぬ軒の春雨

苔あつき草の庵のはるさめは、しづくにだにもふるとしられず

ちる花ををしむ涙か人相の、声もうるほふはる雨の空

④配流の心境（堀丹後守あての手紙）

出家は三界を家とする事勿論に候間、何とても非事もなく候。武士之御国加え同前と存候面居中候。御気遣候間敷候。御なげきも候間敷候。世をなげき身をかなしむは、白地凡夫（ずぶの凡夫）の上に候。凡夫にも自然と得心の者は、世を嘆事はなく候。為法為二先師、我と心より如此成行候身に、何の嘆あるべく候哉と存候。御折檻の初候えば、又御赦免の終も可有之候。命候わば、互に可逐一再面一候

⑤小出大和守あての手紙

我等儀は、乞食非人同前に御座候。今の世に、出家にも俗にも、私が身ほどに打ちもぎ申したる人は無い之候。よるもひるもねるも人に対面申すら、周防殿へまかり出候も、着のみ身のままに仕りて居り申し候

⑥肖稚寺あての手紙

貧賤是僧常也。無い衣則乞い衣。無い食則乞い食。蓋乞衣乞食。僧常也。

沙門の衣くさり色にそむるを本意とす。色をてらすこと、末の世に出来たる事なり

身は麻にやつしながらも今日はまた、心にかゆる花そめの袖

⑦『結繩集』

飯は何の為にくふものか。ひだるさ止ん為にくふものか。しかるにそへ物なくてめしのくはれぬといふは、皆人の僻なり。ひだるさやめんための計略なり。添物なくて飯の喰われぬといふは、いまだうへのきたらざるなり。若し飢来る其時に及んでは、こぬかをも撰ぶべからず。況や飯に於てをや。何のそへ物かいらむ

ひだるさに寒さに恋をくらぶれば、恥かしながらひだるさがます

⑧但馬の実弟秋庭半兵衛への手紙

→配所の衣食住をこまごまと報じ、自分に対する土岐山城守、堀丹後守の心づかいが、親が子を思うように親切だといい、あまりに気をつかわれるので恐ろしいほどだ、出家は三界を家とする一衣一鉢の身、どこへ行っても悲しくはない、物をいただいても使えないので、いただき物は右から左へあげてしまう、お金もおなじこと、今後はあれこれくださらぬよう願いたい、手紙も諸方からいただくと、返事に一苦労だから、上ノ山城の方々に頼んで、どこからの手紙も一切見ぬことにしている。京、堺から来

た使いも、逢わずに返してしまった・・・

◎60歳：許されて江戸に帰る

◎土岐山城守に沢庵が槍術の極意を伝授→自得記流を創始

『自得記』「御序」（沢庵の言葉）

我空、人空、劍空。右三空一心観、百戦百勝之功在干此者也

↓

『不動智神妙録』（柳生但馬守のために書いた剣術指南書）

貴殿の兵法に当て申し候はば、太刀を打つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて打って人を切れ、人に心を置くな。人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまひぞ。鎌倉の無学禅師、大唐の乱に捕へられて、切らるゝ時に、電光影裏斬り春風。といふ偈を作りたれば、太刀をば捨てて走りたると也。無学の心は、太刀をひらりと振上げたるは、稲妻の如く電光のぴかりとする間、何の心も何の念もないぞ。打つ刀も心はなし。切る人も心はなし。切られる我も心はなし。太刀も空、打たるゝ我も空なれば、打つ人も人にあらず。打つ太刀も太刀にあらず。打たるゝ我も稲妻のひかりとする内に、春の空を吹く風を切る如くなり。一切止らぬ心なり。風を切ったのは、太刀に覚えもあるまいぞ。かやうに心を忘れ切って、万の事をするが、上手の位なり。舞を舞へは、手に扇を取り、足を踏む。其手足をよくせむ、舞を能く舞はむと思ひて、忘れきらねば、上手とは申されず候。未だ手足に心止らば、業は皆顛白かるまじ。悉皆心を捨てきらずして、する所作は皆悪敷候。

（正木晃氏資料より）

以上

お問い合わせはこちらへ

羽州街道交流会 事務局 齋藤仁市

TEL.070-6617-9933 TEL/FAX.023-674-9933

E-mail: info@ushukaido.com